

□ 学校教育目標と経営の方針

(1) 本校教育の基本的な考え方

◆井の中の蛙 天空の高さを知る

浦崎は、松永湾にそった沼隈半島の突端部にあり、尾道市の東端である。竜王山をはじめとする低い山並みからなる地形は三方を海に囲まれており、眼前の島影と一体を成して風光明媚である。

古くこの地に住まいを構え集落を成した人々は、「打瀬漁法」や「塩田」、1930年頃の高瀬業隆盛に見るように豊かな瀬戸内の海と共に生きてきた。そんな海を仕切るように広がる潮土手は、1600年代に始まった新田開発と共に整備されてきた。新たに拓かれた土地は、「新田地区」という地名とともに現在に至り、未来を信じた人々の熱い思いを想起させる。

ちなみに幕府天文方 伊能忠敬は、1806年(文化3年)3月に、この潮土手を歩測しながら内陸に広がる新田や、山裾にある「太閤手植えの松」を眺めたはずである。

このように豊かな地誌に恵まれた浦崎ではあるが、今日的課題として、地理的・経済的・社会生活上の閉塞状況がある。市中心部からは遠く、福山市を挟む飛び地にあり産業基盤の脆弱な現状は、少子高齢化・人口の減少に拍車をかけている。当然、小中学校の生徒数も減少を続けている。本校は、各学年1クラス20人に満たない現状である。生徒たちは、幼年期からの固定小集団のまま、行政的にも地形的にも他校との接触が少ないことから、「井の中の蛙」に例えられ、高校進学後の集合大集団への適応や人間関係の形成に不安要素を持っている。

浦崎の子どもたちは、浦崎の狭さを知っている。しかし、狭い浦崎に豊かに広がる自然や歴史、そして、営々と続いてきた人間の暮らしと営みの尊さには、十分には気付いていない。浦崎では当たり前にある「神楽」や「亥の子」、「町内駅伝」や「浦崎ふれあい祭」などの地域行事が、当たり前でないことを知るのには、「井の中の蛙が天空の高さを知る」事に通じている。

自らの生まれ育った郷里に愛着と誇りを持ち、大海に出てもたじろぐことのない生徒の育成をめざさなければならない。

◆未来を教育に託す

浦崎の先人たちは、海と共に生きてきた。その一方で農業へのこだわりは強く、「い草」や「カンラン」「無花果」栽培では、その名を広く知らしめている。

海と陸の双方に生業の途を求めた住民の共同体意識は強く、「地区社協」「区長会」を始めとする地域団体が活発に活動しており、住民福祉・相互扶助に貢献している。

また、神楽や祭りに地域を挙げて取り組み、いにしへの伝統・風習を今に伝えている。そんな地域保護者の学校教育に対する関心は高く、新校舎建築(平成元年完成)では、将来にわたる浦崎の財産とすべく、地域一丸となった取組がなされた。浦崎中学校は、潮土手に隣接し「新田」の中に建っている。

学校施設は、生涯学習、地域行事、社会体育などで活発に利用されており、物心両面における地域コミュニティの拠点になっている。また、敷地内にある「浦崎地区プール」は、学前・小・中それぞれの子どもたちが利用しており、「認定こども園・小学校・中学校」の連携による「浦崎15年連携教育」の推進にも寄与している。

地域の学校への協力・支援は厚く、「地域の子どもは地域が育てる」という地域の教育力が、温かいまなざしとなって学校教育にも向けられている。まなざしの先は、浦崎の未来を見ている。未来は子どもたちとその教育に託されているのである。まさに、「1年の計は、米を植えよ。50年先のことなら、木を植えよ。100年後を考えるなら、子どもを育てよ」である。

子どもは「学校で学び、家庭で育み、地域で育つ」のである。そのためには、地域に開かれた信頼される学校づくりが不可欠であり、学校と地域双方向の交流を基盤とする「教育共同体」づくりが求められている。

また、昨年度から学校運営協議会(コミュニティースクール)がスタートした。地域・保護者と三位一体となり、地域社会・グローバル社会・未来社会で活躍できる子ども達の育成が求められている。

◆小よく大を制す

生徒は、保育所(認定こども園)から同一の小集団で育っている。指導がしやすい面もあるが、固定化された人間関係の中で、周りを見ることが多く、横並び意識が強い。自分の考えを積極的に出し、みんなをリードするという姿勢も少なく、学習集団としての活力に欠けている。また、集団内の力関係から水面下で生徒間トラブルが発生する可能性を否定できない。従って、個と集団のかかわりに視点を置いた生徒集団づくりを進めるとともに、コミュニケーション能力や自己決定力の育成を通して、生徒一人一人の自己肯定感を高めていく必要がある。

園小中合同行事でのリーダー性や浦崎中魂を自覚鼓舞しての活動力、15年間で培われてきた結束力の強さなど、小規模校としての強みは、弱みを凌いで余りある。「小よく大を制す」の気概を生徒・職員で共有し撃って出たい。

「自立と自律」を根に持ち、「他者の痛み思いを馳せる事ができる」豊かな心を芯木とする子どもたちの育成に邁進しなければならない。

◆「浦崎15年連携教育」

約二十年以上前に荒れる中学を経験した本校は、再生の取組として、地域から「信頼される学校づくり」を最重要課題としてスタートした。その後、平成14年度からの改革では、学校に「安全と安心」を生み出すために、他者を思いやる豊かな心を育てる教育と、その前提としての「組織的な学校運営体制の確立」に力を注ぎ、改善・変革の歩みを確かなものにしてきた。続く取組として、「知・徳・体」の基礎基本の徹底を前提とし、「自らの進路を切り拓く確かな学力を育成する授業の創造」を重点としてきた。

時の流れとともに、荒れた当時のことを伝える職員は少なくなった。しかし、新旧の職員が、事実の継承と課題認識の共有深化に努め、浦崎中学校再生への道のりを決して風化させることなく、取り戻した「信頼」を一層確かなものにしなければならない。

現在、園・小・中の連携による「浦崎15年連携教育」を柱に取り組んでいるが、まさに子どもは「学校で学び、家庭で育み、地域で育つ」という教育共同体づくりを具現化するものである。

従来の園・小・中それぞれの取組から、15年間を見通しながら、学びの系統性や連続性について考えることは、進路を切り拓く確かな学力を身につけさせるとともに、小1ギャップや中1ギャップの解消につながるものである。

また、異年齢交流では、思いやりの心を育むとともに、自己肯定感の高まりが期待される。花いっぱい運動に代表される地域と連携した体験活動も、地域とのつながりを一層根づかせるものである。今後、益々の取組内容の深化とその成果が問われている。

とりわけ、中学校は、浦崎15年教育の集大成ともいべき3年間であるだけに、故郷浦崎に愛着と誇りを持たせるとともに、卒業後、広い社会に出ても「感性豊かに しなやかに たくましく生き抜く」力を身につけさせなければならない。保護者・地域の熱い期待の中に、われわれはいるのである。そのような本校の今年度の学校経営は、昨年度を引き継ぎ、また発展させ、次のようなゴールを定め、進めていく。